



この人を たずねて

専修大学人間科学部 教授

大久保街亜氏

インタビュー
小林 恵



Profile — おおくぼ まちあ

2002年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（心理学）。日本学術振興会特別研究員、同海外特別研究員、専修大学文学部講師、准教授を経て、2014年より現職。専門は認知心理学。著書は『伝えるための心理統計』（共著、勁草書房）、『認知心理学 新版』（共著、有斐閣）、『言葉は身振りから進化した』（単訳、勁草書房）など。

■ 大久保先生へのインタビュー

— 先生のご興味は、日常認知と左右差とどちらも広いですが、どのようにこれまで研究されてきたのでしょうか。

何かを明らかにしようとか、自分のテーマはこれだと突き詰めて考えたことはあまりないんです。人によっては「私はこれの専門です」「これに関しては誰にも負けません」ということがあると思うのですが、私はあまりそういうものはありません。「これ面白いな」と思ったら、まず始めてみるという感じで研究してきました。テーマにもあまり一貫性はありません。手近なものに興味があってそれについて何か説明したい・理解したいというのが根本にあるのかなと思います。また大体2～3年やると飽きてしまうので、2～3年ごとに全く違う研究をしている感じがします。

ちなみに、修士論文は最初盲人のイメージのことを研究していましたが、途中から健常者のイメー

ジ、イメージ一般のことを始めました。そこから今度は空間の把握について研究を始めたら、脳の左右差の話が研究との関連で面白かったので、博士論文でもそのテーマで研究しました。

— これからも左右差を基本に、日常の現象を実験的に検討していきたいというお考えですか？

冷静に考えるとそれがいいと思うんです。でも、なかなかそうもいかず困っています。全く違うことを始めると、まず自分の知識がない。始めたとしても、その研究領域で合意されているようなことを十分知らないために統制が若干不十分な部分があったりなどということが、起こったりする。そういう意味で非常に損をします。でも、生産性の追求だけだとあまり面白くないですからね。そこはほとんどに考えてやっています。とにかく「まあやってみようか」といろいろ始めてしまいます。冷静じゃないんですね。たぶん。

— 先生が考えられる心理学の面白さや研究のスタンスについて教

えてください。

心理学の楽しさのひとつには、割と手軽に、非常に専門的なことを研究できることがあると思います。本気になって取れないデータというのがあまりない。アイデア・興味の勝負でいろいろなことができると思うので、そういう部分を大事にしていきたいと思っています。好きな食べ物を食べる順番などにある種の説明がつけられたら面白いじゃないですか。比較的日常でみられるような疑問を、もう少し実験に置き換えられるような形に変えて確かめてみるのがいいのかなと今思っています。それは既存の学術的な体系の中に位置づけられるのではないかと思うんです。

— 日常の一場面を心理学の実験として検討するうえでどんなことを重視していますか。

日常的に興味があることを煮詰めていって実験室に落とし込むのは大変です。私は、いくつか確立されている実験方法と興味が結びつくかと考えることが多いです。ある程度学術的な背景がしっかりしたものに結びつけると、骨格は決まってきます。方法論だけはきちんとしていれば、テーマはフレキシブルにできます。振り返ってみると、大学院時代は、研究方法の哲学や統計法などをずっと学んでいた気がします。

— 大学院時代に積み重ねてきたものは大きいですね。

これはよくいわれますが、一年経つごとに忙しさは増して減ることはない。大学院時代に何をすることが大事になってくるのではないかと思います。振り返ると、いろいろな場所で研究できたのはよかったと思います。大学院生・ポスドクを経て、海外にも行きました。研究の仕方・タイプから性格、どういう研究が優れているかという

価値基準まで全く違う先生に学べたので非常に面白かったと思います。一つの研究室だけで学ぶというのは、どんなに良い先生でも限界があります。大学院修了後、ポスドクで少し異なる領域に行くと習慣も全く違うので、すごく苦労することもあると思いますが、それも含めていろいろなところに行くと見えてくるものがあります。私が若い頃にもうちょっとやっておけばよかったと思うのは、もっと工場みたいな研究室で生産性を求められる形で研究することです。そういう形は形ですごく良い部分もあるから、一度経験しとくとよいかと思うんです。

——この先、この日常を切り取って研究したいということはあるですか。

ベイズの推論です。何回聞いても全然よく分からないんです。その理論的な仕組みはいいとして、何で自分はこんなに分からないのかということに興味があります。いろいろ調べたりしているけど、なかなか形に落とし込めない難しさがある。その他にも、レストランのフードメニューの並び方でどういうふうに注文が変わるのかなど、研究したいことはたくさんあります。

——これから心理学をやろうとする人、若手の研究者に向けてのメッセージをお願いします。

大学院生・若手の方は、それは自分の専門じゃないから、口出せることじゃないからといってあまり手を広げなかったり何かモノを言わなかったりしますが、そういうのはよくない。立場とかをあまり気にしないほうがいいなと思います。少なくとも研究の場では空気を讀むなんて不要です。自分は若輩者だからとか、この分野は素人だからと消極的になったり、もうちょっと調べてから発表をなどと言っていたら、多分何も出せない。

もちろん適当なもの出しているとは言わないですが、自分なりにきちんと突き詰めたのなら、どんどん出すべきだと思います。日常でも積極的になるべきです。議論や論文執筆にも当てはまりますが、若い人はポジショナルなものを考えすぎのような気がします。それから批判されることを怖がっている部分が多い。他人の話なんて20パーセント程度聞くくらいの心持ちでいいんじゃないかなと思います。

■インタビューの自己紹介

インタビューを終えて

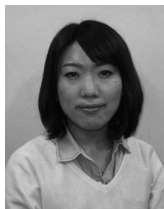
大久保先生にインタビューさせていただいて心に残ったのは、「若いときこそいろいろな場所で研究することで得られる経験の大きさ」と「若手研究者のスタンス」でした。先生や研究室ごとにさまざまな慣習や考え方があり、取り組み方は違いますが、それに触れることは非常に大切だと改めて思いました。自分の研究に対する考え方などの根幹はしっかり持っている必要があると思いますが、それだけに囚われていたら一つの視点や考え方に凝り固まり、新しい視点や物事を多角的に捉える柔軟性を失うように思うからです。私自身はまだ現在所属している研究室が二つめで、いろいろな場所での研究を経験しているわけではありません。しかし両研究室ともに、他大学や他の研究室を経ていらしたポスドクの先輩方がたくさんいらっしゃるし、研究に対してコメントをいただくだけではなく、先輩

の体験談を聞いたりすることができます。

また私自身、大久保先生が仰っていたように目上の先生方に質問したりすることは恐れ多いと尻込みしてしまいがちですが、知識だけでなく先生の考え方を知る機会を逸することになり、本当にもったいないことだと思いました。今回のインタビューは、今までの自分の環境を見つめ直し、そこでの自分の振る舞い方を考える大きなきっかけとなりました。

現在の研究との出会い

心理学との出会いは偶然でした。同級生の9割は臨床心理士になる夢を持って大学に入学していましたが、私はそうではなく、かといって研究者になることも考えていませんでした。転機は、卒業論文のテーマを決める参考にと、当時のゼミの先生が紹介してくださいった本との出会いでした。「赤ちゃんでも顔を区別することができる」ということにとっても興味を惹かれたのです。もともと赤ちゃんや子どもが大好きだったこともあり、赤ちゃん研究の世界に足を踏み入れました。そこから現在も赤ちゃんの顔認知能力、特に人物を処理する能力の発達について、近赤外分光法(NIRS)を用いた脳活動計測から検討を続けています。私たちが赤ちゃん研究を続けることで、お子さまをお持ちのご家族の方や保育・医療の現場で赤ちゃんに接している方々が日々感じている赤ちゃんの不思議や疑問を解決する一助となればと思っています。



Profile — こばやし めぐみ

日本学術振興会特別研究員PD(自然科学研究機構生理学研究所)。2008年、日本女子大学人間社会学部卒業。2013年、中央大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。博士(心理学)。同年より現職。専門は発達心理学、実験心理学。論文は *Do infants represent the face in a viewpoint-invariant manner? Neural adaptation study as measured by near-infrared spectroscopy.* (Frontiers in Human Neuroscience) など。